

書 評

えんはこの点にある。いまひとつ、男性中心の職場に入っていく女性と、女性をとり巻く文化的社会的規範の関係についての言及がないことも気になる。男性の社会に入っていく女性の地位や立場が不利な状況に置かれることは自明のことなのだから、男性の枠組の中でそれを比較するだけではなく、これらの女性が、日常の女性に対する役割期待や規範との軋

轢や葛藤の中でどのように考え行動し進んでいくのかがとらえられれば、この種の研究は面白くなっていくであろう。もし著者が今後同様の研究を進められるのであればこうした点も視野に入れられることを期待したい。

◆四六判 221ページ, 2000円
東信堂

■ 書 評 ■

片岡徳雄著

『日本的親子観をさぐる―「さんせう太夫」から「忠臣蔵」まで―』

東京工業大学 原 芳 男

「家庭内暴力」をそのまま英語に訳すと、その内容は誤って理解される可能性が大きい。今日の日本で家庭内暴力とは、中学生や高校生が親に対してふるう暴力のことであるが、外国では、親が幼児に対してふるう暴力のことである。そこで、日本の家庭内暴力について外国人と話す機会があれば、それが、子どもの親に対する暴力であることをまず説明しなければならない。

ところでこのような家庭内暴力の日本的「特殊性」はどこからくるのか。ふつうならば、第二次大戦後の日本の家族生活の変化、とくに、弱くなった父親、母親の過保護、あるいは中学生で両親の背丈をこえる子どもたちの身体的成長、さらには選別、差別の受験体制をあげる人が多いであろう。しかし、本書の著者は、近松の晩年の作、「女殺油地獄」の与兵衛

衛の例を出して、日本型家庭内暴力がすでに18世紀前半の日本にあったことを指摘するのである。大阪、天満町の油屋の次男に生まれた与兵衛は、自分の希望が入れられぬと知ると逆上し、養父を「うつむけにしてふみのめし」、「肩骨背骨」「顔も頭も」、さんざんに踏み、止めに入れた妹も踏みつける。さらに実母でさえも天秤棒でたたきつける。著者はこのような18世紀の家庭内暴力が、養父の「遠慮」と実母の「つくろい」、「気がね」がつくる親子関係の「不条理」からくるものだと説明する。間もなく21世紀を迎えようとする今日の日本の読者は、家庭内暴力という現代日本社会の問題を、近松の浄瑠璃を通して、いわばその原型において理解するように導かれる。そして、本書につけられた帯の表現を借りると、「子の自立や世代交替、親子の断絶や別

離など、歌舞伎や浄瑠璃、謡曲、説経に織り込まれた家族関係から、親と子の在り方を問い直す」ことが本書の目的となっている。

この仕事を著者は、中世から江戸中期まで、15世紀から18世紀までの400年間の古典芸能の作品を資料として行っている。江戸後期をとりあげていないのは、それが、「近代への橋渡し」の時期で、より強く明治以後と結びついているからで、著者としては、本書に続く出版を考えてのことだと思われる。つまり著者としては、中世以後、日本の大衆と結びついた芸能の作品を通して、日本の親子関係を歴史の中で理解しようとしているのである。

これは大変な仕事である。思いつく人はたくさんいても、やりとげる人はすくない。少なくとも今まで教育社会学の人にはいなかった。著者にとってもこの仕事は、「50の坂をこえて、転じた新しい研究領域」だと言う。筆者としては、ただその成功を心から祈りたいと思う。

新しい研究領域の開拓にあたっては、いくつかの主要な問題がある。研究対象を明確にすることと、研究の方法である。研究対象については、著者が多分心をくだいて見いだした主題、親子関係があって、これは成功しており、一貫したテーマとして本書を引き締まった内容のものとしている。当然のことながら作品はなんにも親子関係の研究者のために書かれたものではないので、よほど禁欲しないと散漫になる危険があったはずである。

もっともむづかしい問題は研究方法であろう。このことについて著者は次のよ

うに言っている、「私自身とまどっている。精神分析や心理学ではないし、文芸学の立場でもない。文芸社会学と言えるほどのものでもない。ただ、これら大衆芸能に接した当時の人々なら、そこに示された親子関係からこんなイメージをもったのではないか、大衆へのインパクト（印象）はこんなではなかったか——「作り手」の心までは分からないにしても、「受け手」の一人として私の注目を引いたものを摘出、紹介し、若干のコメントを書き示したにすぎない。物語の表面に現れた親子の行動や関係に目を奪われて、深層の心や裏に秘めたねらいなどとても至っていないだろう。それらは、本書のタイトル「日本的親子観」の一端に少しでも迫ってみたい、という努力の跡でしかない。「日本的」とは何かを明らかにするには、もちろんまだまだ多くのことが残っている。」

限られた紙数なのに、長い引用になってしまった。途中で切ろうと思ったが、できなかった。ここには著者の率直さと大胆さが同時に表現されている。率直さとは、方法的に精神分析学や心理学ではないし、「文芸社会学」と言いたいが、それを言うには方法論的に不十分だと自覚しているという率直さであり、それにもかかわらず、新しい研究領域をみつけ、それを開拓しようという強い意志をもつ人間の大胆さがある。

著者の立場は健康なプラグマティズムである。よく組みあげられた方法論を完成してから仕事にとりかかるというやり方ではない。与えられた条件のもとで、利用できる知的道具は何でも使って、問

書 評

題解決に取り組む。最初につくる家は掘立小屋でもよい。そこに住み、住みながら改善して、かならず大殿堂にしてみせる。これが著者の立場であり、この立場がそのまま、研究のプラグマティックな方法論になっているように思う。第二次大戦直後に青年期をすごした著者や筆者の年齢層が身につけた考え方で、最近の若い研究者には少なくなってきたものである。

「我に方法（論）を与えよ。さらば研究せん」というのが最近の傾向である。そして方法（論）は、ないよりあった方がよいのはもちろんである。たとえば、河合隼雄の「昔話と日本人の心」（岩波書店）は、ユング派の心理学の方法論とすぐれた先行の業績の上に立って書かれていることが分かる。河合氏の仕事は、西洋における自我発達の根源的な様相を神話的イメージでとらえたエーリッヒ・ノイマンの「意識の起源史」の上に立ち、それだけではとらえきれない日本人の心を、ユング派分析家としての河合氏自身の臨床経験に基づいて、日本の昔話から理解しようとしたものである。

率直に言って、河合氏が立っている地点と片岡氏が立たざるをえない地点との間には、資料を取り扱う方法論について、かなりの差があると言わねばならない。

しかしこれは仕方がないことで、もちろん著者の責任ではない。問題は、著者がこれからどのような方法論を編みだそうとしているかである。

著者は、巻末のエピローグで、それが中内敏夫氏らの「心性史」の方向であり、また中内氏もその影響を受けているフランスのアリエスやバダンテールなどのアナール派の仕事から学びたいとしている。

このような方向性から、これからの著者の仕事はますます歴史的な研究、教育の社会史ともいうべきものに接近していくかもしれない。しかし、本書に見るかぎりでは、著者にはいわゆる社会学、教育社会学の既成の分野にふみ止まろうとする意識的な努力がみられる。このような努力は、この新しい分野のより大きな発展のためには、第二義的なことのように思う。もっと自由で、何でも試してみる貪欲さがあってよいと思う。どのような自由な探究の中からでも、著者の健全なプラグマティズムは、ブーメランのように、著者を教育社会学に引きもどし、結局、われわれの教育社会学に新しい研究領域を開拓することになると信じている。

◆ B 6 判 206ページ, 750円
日本放送出版協会